

投稿

月に関する言葉

福江 純（大阪教育大学）

1. 実践的理科力養成プログラム

大阪教育大学では、理科に強い教師を育てるために、熱心な先生は以前からも理科実験・理科実習に力を入れてきた。ぼくなどは元来が怠け者だから、できるだけ近づかないようにしていたのだが、なかなかそういう時勢でも立場でもなくなってきたようだ。

さらに最近では、大学としても組織的な取り組みが始まって、若干の予算も付くようになった。そのような流れの中で、小学校教員免許に必須の科目「理科 I」「理科 II」で内容の大幅な見直しが行われつつある。理科分野の学生には理科関連の必須科目があるが、「理科 I」「理科 II」は理科関連の必須科目がない文科系学生が主として受講する科目だ。人数が多いので十数コマ開講されている（I と II に差はない）。

従来は、物理・化学・生物・地学の各分野の先生が、それぞれ半期ずつ、バラバラな内容で講義（+実験）などを行っていた。それを、今回、

- ・講義形式から実習実験主体にする
- ・半期の中で物化生地すべてやる

という、きわめてドラスティックな改革をしたのである。昨 2007 年度に 4 コマほどで試行し、本 2008 年度からは 12 コマ全部で行っている。

幸い、「実践的理科力養成プログラム」事業として、特別教育研究推進経費が付き、実験器具・消耗品・学生アルバイトなどは賄えることになったが、一週間以内ぐらいの間に消耗品のリストを提出とか、月内に納入せよとか、昨年度末はなかなか大変だった。

というより、2 年ほど前に、そんな話が急

に降ってわいたときは、「え、何をしたらいいの」って感じである。物化生地で半期だから、たとえば地学(天文)で 3 回ほど行うのだが、そうそうテーマがあるわけでもない。そもそも天文(地学)はフィールド主体なので室内実習が難しい(だから小学校の先生が困っている)。望遠鏡実習は別に集中講義の形で夜間に行っているが、太陽や月や星など小学校で習う内容で室内実習実験をしたことはない。星座盤ぐらいは作れるが、おそらくまったく面白くない。……など、ないないづくしだった。ただ、幸か不幸か、10 年近くジオカーニバルというイベントに参加しているので、そちらで培ったノウハウを注ぎ込んだが、別途報告した「太陽系図鑑」についてもその一つである(『天文教育』2008 年 5 月号参照)。

で、今回は、そのような授業改革の報告というわけではない(報告自体はいずれしてもいいとは思っていたが、まだ始まったばかりなので)。ではなく、たまたまそんな中で、面白いレポートが集まった。相手が文科系の学生だということもあって、あまりハードなレポートを課しても効果ないだろう。それで、「ついたち」とか「みそか」など月に関する和語を少し紹介した回で、月を身近に感じてもらうために、「月に関する言葉」というタイトルで、月の呼び方や月を含む言葉あるいは諺などをレポートで提出してもらった。

で、レポートを読むと、これがなかなか面白い。見聞きしたことがある言葉も多いがはじめて聞いたものも少なくない。2 クラス分 100 人近くのレポートが集まると、なかなかのデータ量である。自分でこっそりネタ集を作って、あちこちで使ってもいいのだが、せ

つかくなので、整理して紹介しようと思った。なお、文化的な観点からまとめたので、天文学の辞典に載っているような専門用語は大部分省略した。

以下、月の呼び名、月を含む言葉や諺（ことわざ）の順にまとめてみる。

2. 月の呼び名

まず、月自体の呼び名を整理してみた。ただし、分類は適当である。

<月齢の名称など>

月齢 地球からみて太陽と月が同じ方向になる瞬間が「朔（さく）」で、朔からの経過時間を日の単位で表したものが「月齢」。

月相 月齢をおおまかにわけたもので、「朔」「弦」「望」「晦」などとなる。

新月・朔 0～1（月齢、以下同じ）

既朔 1～2

三日月（みかづき） 2～3

半月・上弦の月・弦月・弓張り月 7.5～8

十日夜（とおかんや） 9～10

十日余りの月 11 ごろ

十三夜月・後の月 12～13

小望月（こもちづき）・幾望（きぼう） 13～14

満月・望・十五夜 14～15

十六夜（いざよい）・既望（きぼう） 15～16

立待月（たちまちづき） 16～17

居待月（いまちづき） 17～18

寝待月（ねまちづき）・臥待月（ふしまちづき） 18～19

更待月（ふけまちづき） 19～20

二十日余りの月 22 ごろ

半月・下弦の月・弦月・弓張り月 22.5～23

二十六日月 25～26

晦日（つごもり） 27～28

一日（ついたち） 月が最初に出てくるので、月が立つ「月立ち（つきたち）」が音変化した。

朏（みかづき）朏（ひ）と書いて「みかづき」と読む。姿が初めて見えだした月を表す言葉。

盈月（えいげつ） 新月から満月に至るまでの間の月。この間の月はだんだん円くなる。

十六夜・猶予（いざよい） もとは猶予で、「ためらう」の意味。月の出が十五夜より少し遅いのを、月がためらっていると見立てた。

晦日（つごもり） 月が見えなくなる「月隠り（つきごもり）」が音変化した。

三十日（みそか） 大和言葉では三十は“みそ”になる。

大晦日（おおみそか） 太陰暦では一年の終わり月の30日（または29日）のことだったが、いまは12月31日を指す。

<陰暦の月の名称など>

睦月（むつき） 正月に家族や親戚が集まって睦み合う「睦び月（むつびつき）」から。「生月（うむつき）」が転じたという説もある。

如月（きさらぎ） 旧暦の2月は現在の3月半ばで、寒さがぶりかえして衣を更に着る「衣更着（きさらぎ）」から。

弥生（やよい） 暖かな陽気にすべての草木が茂るという意味の「木草弥や生い（きくさいやよい）」が詰まって。

卯月（うづき） 卯の花が咲く季節なので、「卯の花月」から。

皐月（さつき） 早苗を植える「早苗月（さなえづき）」が略されて、後に皐月の字が当てられた。

水無月（みなづき） 旧暦の6月は夏の盛りで、水が枯れて無くなる月だから。

文月（ふづき） 短冊に歌や字を書く七夕の行事から「文披月（ふみひろげづき）」、あるいは稲穂が膨らむ月「ふくみ月」から。

葉月（はづき） 葉の落ちる月「葉落月（は落ちづき）」が転じた。

長月（ながつき） 秋の夜長を意味する「夜長月（よながつき）」の略から。

神無月（かんなづき） 一年のことを話し合うために神々が出雲大社へ行ってしまい、出雲以外では留守になるという意味の「神なき月」が転化して。

霜月（しもつき） 文字通り霜が降る月「霜降月（しもふりづき）」の略から。

師走（しわす） 12月は僧（師）を迎えてお経を読んでもらう月なので、「師馳す」が転化した。

他にもいろいろな説がある。たとえば、

<陰暦の月の異称>（大槻文彦『大言海』）

睦月（むつき） 稲の実を初めて水に浸す月「実月（むつき）」から。

如月（きさらぎ） 草木の萌し（きざし）出る月「萌揺月（きさゆらぎつき）」から。

弥生（やよい） 稲の苗がいよいよ生い伸びてくる「弥や生い（いやよい）」から。

卯月（うづき） 種を植える「植月（うつき）」から。

皐月（さつき） 早苗を植える「早苗月（さなえつき）」から。

水無月（みなづき） 田に水を湛える「田水之月（たみのつき）」が変化して。

文月（ふづき） 稲の穂を含む「含み月（ふくみづき）」から。

葉月（はづき） 稲穂の発する「発月（はりづき）」が転じた。

長月（ながつき） 稲の熟する「稲熟月（いなあがりづき）」の略から。

神無月（かんなづき） 新穀で新酒を醸す月「醸成月（かみなんづき）」から。

霜月（しもつき） 「食物月（おしものづき）」の略という。

師走（しわす） 「歳極（としはつ）」の略転という。

<その他>

正月 政治に専念した秦の始皇帝の降誕月を政月（セイグワツ）と言っていたものが、正月と書かれるようになった。（室町中期の書）

初春 一月のこと。旧暦では一月から春が始まるから。

夢見月 三月のこと。桜のことを夢見草ともいい、桜の咲く季節だから。

風待月 六月のこと。蒸し暑い日が続くと風を恋しく待つから。

愛逢月 七月のこと。織姫と彦星の七夕伝説から。

色取月 九月のこと。木の葉が色づきはじめるため、色取り（彩）から。

暁月夜（あかつきづくよ） 暁に月の見える状態や、その月のこと。有明の月と同じ。

朝行く月（あさゆくつき） 朝まで残っている月影。

油月（あぶらづき） 水蒸気のために月光がとろんとして、あたかも月の周囲に油を流したように見える月。

有明の月 明け方になっても残っている月の総称。

烟月（えんげつ） かすんだ月。

中秋の名月・仲秋の名月 いわゆるお月見で、観月の絶好期であり、月下に酒宴を張り、詩歌を詠じ、ススキを飾り、月見団子などを盛って、御神酒を供え、そして月を眺めて楽しんだと言われている。農耕行事とも結びついて、収穫の感謝祭としての意味ももっていた。仲秋の名月は「芋名月」とも呼ばれるが、これは里芋など芋類の収穫儀

礼であったことに由来する。

月の名残り 秋の月の最後の意味で、陰暦 8 月 15 日の月に対して、9 月 13 日の月を指す。

3. 月を含む慣用句・諺（ことわざ）

非常に多いので、基本的なもの、面白いものやクールなものなど、ちょっと見えそうなものを中心に整理してみた。読み方が間違っていないければ、アイウエオ順のはず。

雨夜の月 実現不可能なことを指すタトエ。

逆に奇跡を意味することもある。

いつも月夜に米の飯 ぜいたくなことを指す。

猿猴が月 猿が水に映る月を取ろうとして溺死した故事から、身分不相応な高望みをすると身を滅ぼすということわざ。

陽炎稲妻水の月 捕まえることのできないもの、身軽ですばしこいもののタトエ。

花鳥風月 天地自然の美しい風景。

花天月地 花は美しく開き月は地上を照らす風景で、春の花時の月夜の風景。

花朝月夕 春秋の盛りの気候がよい時期で、旧暦 2 月中旬と 8 月中旬ごろの時節。

鏡花水月 目で見ることはできるが、手に取ることができないもののタトエ。

月下氷人 月下老人と氷人の合成語で、男女の縁を取り持つ仲人のこと。「月下老人」とは、唐の韋国（いこ）が旅先で、袋に寄りかかって月の下で書を調べている老人に出会い、“袋の中にある赤い綱で男女の足をつなげば夫婦の縁が結ばれる”と言われた故事。“結婚する運命の男女は小指を赤い糸で結ばれている”という話の由来でもある。また「氷人」とは、晋の令狐策（れいこさく）が夢の中で、光る氷の上に立っていると、氷の下に人がいて、その人と話した。夢の話策耽（さくたん）という占い師に話すと、氷下は陰（女）で氷上は陽（男）

で、陰と陽が話し合ったのだから、あなたは結婚の仲立ちをするだろうと予言され、実際にそうなったという故事。この二つの故事から、月下老も氷上人も、共に縁結びの神様とされる。また、二つを合わせて「月下氷人」といい、仲人の雅語として用いられるようになった。

月経 月経の周期が月の公転周期（27.3 日）や満ち欠けの周期（29.3 日）に近いことから、「お月様」、「月の使者」などとも言われる。

月光読書 哲学をすることを意味する。

心の月 心が清く明らかなことを意味する。

月代（さかやき） 武士などが額の髪を頭の中央にかけて半月形に剃り落としたもの。

羞花閉月 美貌に打たれて花は羞じらい月は隠れるの意で、女性の容貌がきわめて美しいことのタトエ。

雪月花 雪と月と花ということで、四季折々の美しい眺め。

月と鼈（すっぽん） 月もスッポンの甲羅も外見はどちらも丸いが（京阪神ではスッポンのことをマルという）、実体はまったくかけはなれているところから、二つのものの間に非常に差があることのタトエ。

月並 元々は毎月決まて行くことを意味していて、俳句などの毎月の例会を“月並（みの会）”と言っていた。俳句革新運動の中心人物だった正岡子規が、幕末から明治にかけての平凡な俳諧を批判して“月並調”と読んだことから、平凡なさまを表す現在の意味になった。広めたのは夏目漱石だとされる。

月の鏡 満月の異称。

月の剣 三日月の異称。

月の雫 露の異称。

月の鼠 月日の過ぎゆくさま。

月は惜しまれて入り、花は散るをめでたしとする なにごとも引き際が大切だという意

味。

月に叢雲、花に風 美しい月には雲がかかり、鮮やかに咲く花には風が吹き付ける。世の中は美しいものがすべてではなく、美しいものには障害がつきものである。

月満ちれば欠く ものごとには頂点があつて、そこから先には必ず衰えがあることのタトエ。

月夜に釜を抜かれる 不注意きわまりない、油断もはなはだしいことのタトエ。

月夜に釜を掘り出す 思いがけない幸運を引き当てると言うタトエ。

月夜に背中を炙る まったく意味のないこと。

月夜に提灯 無益なこと、まったく不必要なことのタトエ。

月夜に提灯も外聞 実際には不要なものでも、世間体のためには必要だということのタトエ。

月よ星よと眺む 月や星を美しいものと仰ぐように、非常に寵愛し賞美すること。

月を指せば指を認む 月を指さして教えると、月を見ないで指を見る。すなわち道理を説いて聞かせても、その本旨を理解できずに、文字や言葉に拘泥して詮索することをいう。

日進月歩 月日とともに、絶え間なく進歩していくこと。

三十日に月が出る あり得ないことのタトエ。

胸の月 胸中が曇らないで清いタトエ。

最中 江戸吉原の菓子屋、竹村伊勢が、満月を象った“最中の月”という煎餅（せんべい）のようなものを作り、それが省略された。

<最後に>

月（つき） 訓読み（大和言葉）の「つき」の語源としては、明るさが太陽の「つぎ（次）」の意味とする説や、一か月に一度欠けて見えなくなるので光が「つきる（尽きる）」という説などがある。また、音読み（漢語）の語源としては、月が満ち欠けする「闕（けつ）」（欠けるの意味）から来ている。

以前からも、講義などで、“ついたち”とか“おおみそか”などの言葉は、その由来をトリビア的に紹介してきたが、日常語なので、それなりに興味は引くようである。「月に関する言葉」、いろいろな使い方をしてみたい。

福江 純